



選考委員特別賞
最相葉月賞

少年の戦争

信州大学教育学部附属松本中学校 三年

村田 充生

村田袈裟彦。

僕の祖父の名前だ。「けさひこ」と読む。昭和三年生まれの八十七才。第二次世界大戦を、海軍飛行予科練習生として経験した。

今からここに記すのは、僕の祖父、村田袈裟彦の戦争体験である。

目を開けると、青空を東へと流れる雲の群れが見えた。

村田袈裟彦は、なだらかな山腹の岩肌に寝そべり、じつと頭を働かせていた。

尋常小学校の教師に、

「お国のためだ。志願して海軍へ入れ！」といわれた。

元来、曲がったことが大嫌いな性格である。先生が生徒を戦争へ送り出すのか、といったら怒鳴り付けられた。が、怒鳴られたことよりも、頭に浮かぶことがある。

袈裟彦は、六人兄弟の長男である。戦時中だから食べ物も満足になく、年下の兄弟たちと分け合って食べる。真夜中に父親と大八車を曳いて隣村まで行き、闇米を買ってくることもあった。

そうした時代の流れもあって、「俺が戦争に行けば、少しは兄弟たちの生活も楽になるかもしれない」と袈裟彦は思った。自分の分の食べ物も、兄弟たちが食べるこ

とができるならばそれが良い、と考えたのだ。袈裟彦は心をきめた。彼は志願兵となり、故郷を離れ、海軍の飛行練習生となった。

三重海軍航空隊は、三重県の香良州にその産声を上げた。伊勢湾を埋め立てて造られ、一九四二（昭和十七）

年七月一日に開所した。予科練（海軍飛行予科練習生）はこの所属である。当時は、最大で、練習生四万人、士官等五千人を有する巨大軍事施設だった。

一九四四（昭和十九）年十二月一日、袈裟彦は予科練の六十二分隊八班へ配属させられた。入隊してからは、厳しい規則の毎日となる。

海軍の敬礼は、一般的に陸軍などの敬礼とは違う。海軍では、狭い甲板に整列するため、隣の人との間隔が短くなる。そのため、本来よりも脇を締め、腕をほぼ直角にして敬礼する。行進の際も気が抜けない。マツチ箱程に見える兵舎まで隊を組んで走って行くが、うっかり足の順列を間違おうものなら教官から喝が入った。十二月七日、普段通りに格納庫前に整列し、直立姿勢で教官の話聞いていたときだった。

突然、大きな揺れにおそわれ、地面に叩き付けられた。一瞬、何が起きたのか分からず、うつぶせのまま目線を上げると、格納庫の窓ガラスが粹ごと落下して粉々に砕け散るのが見えた。気がつくくと、体の前面がぐっしより

と濡れていた。液状化現象である。

東南海地震。阪神・淡路大震災に匹敵するともいわれた大地震だったが、その情報が明るみにできることは無かった。戦時下におけるパニックを恐れた政府が、情報をひた隠しに隠したのだ。炊事場が使えなくなったので、一週間程、食事は乾パンという生活が続いた。

まるで、日本の行く末を暗示しているような、不吉な兆候だ、と袈裟彦は思った。

袈裟彦たち練習生は、班で区分されており、班ごとに、それぞれの班長にまとめられている。また、班長たちをまどめる班長のことを「先任班長」という。

鈴木良太郎班長もその一人だった。

身長は六尺程と高く、大人しく静かな人であった。が、その体から発せられる威容としたオーラを、袈裟彦は感じ取っていた。

「あいつは陸奥に乗っていたんだ」

「陸奥が戦速（戦闘時の速度）三十ノットになるとき、

舵輪を任されたのはあいつだ。あの戦艦陸奥を操るのだから、みんなからは『舵輪の神様』と呼ばれていた」

ある班長はそう語った。「陸奥」とは、「不沈戦艦」と謳われた「戦艦陸奥」のことである。

袈裟彦は、

「いつかは俺も、敵と一戦交える日が来るのだろうか」と思った。そして、舵輪を操っている鈴木班長の姿を、頭の中に描いてみた。

一九四五（昭和二十）年の春、練習生たちは、伊勢神宮へ参拝に向かった。

「これから大勢の兵隊を率いていくお前ら、色々ど覚えとけよ」といったのは、堀部億分隊長である。

岩手出身で、渾名が「ぞうさん」。工作艦明石に乗っていた。明石とは、当時の日本が誇る工作艦で、大破した艦艇をたった一晩で修理してみせ、世界の軍隊を驚愕させた艦である。

大勢の先に立つ者が礼儀を知らなくては困ると、参拝

の方法を神主に教えてもらい、拝んだ。当時の正式な参拝の仕方は、二拝二拍手一礼であった。

神宮は荘厳だった。どこか堀部分隊長の雰囲気と通ずるものがあると袈裟彦は思い、同時に伊勢の神に加護を祈った。

そして遂にその日が来た。

袈裟彦は兵舎で訓練をしていた。「ハトポツポ」と呼ばれる、飛行練習用の木組みの上で、操縦桿とペダル（という設定のもの）だけで平行を保つ訓練だ。一見簡単そうだが、教官が木組みの向きを意地悪く変えるので容易ではない。それでも乗りこなし、平行を保てるようになった。上手く手と足を使ってハトの体を安定させた、その時である。

壁に取り付けたスピーカーから警報が流れ、そして音が聞こえた。

「空襲警報、空襲警報。敵機は志摩半島上空に侵入、北上中。総員配置に――」

みなまで聞かずに袈裟彦は走り出した。毎日の訓練で、反射的に行動に移せるよう、動きが体に染みこんでしまっている。だから行動が素早い。

浜辺に据え付けられた機銃に駆け寄って、動作に異常が無いか確認する。ベルト式の弾丸を取り付け、遊底を引いて初弾装填。ここまでかかった時間は十五秒。射撃準備が完了すると、袈裟彦は一つ深呼吸をした。

機銃の担当は日替わりで、担当以外の練習生は防空壕へ退避する。機銃座は幾つもあるので一人だけというわけではないが、やはり心細い。

日本軍の守備隊が全滅したサイパン島から、名古屋や三重の四日市を直線で結ぶと、三重海軍航空隊が直線上に位置しているのが分かる。即ち、サイパン島から、名古屋や四日市を爆撃しに飛来するB 29や、グラマンF 6 F ヘルキャットが、頭の上を通るのだ。

「嫌なところに造っちゃったもんだよなあ」と、袈裟彦は呟いて、ふと動きを止めた。沖合の上空に何か、光の反射を見たような気がしたのだ。

袈裟彦は目を擦り、反射が見えた方角の空を凝視した。「来た！」と短く叫んで、袈裟彦は銃口を南の空に向けた。

光の反射は段々黒い粒となり、数を増し、こちらへと向かってくる。

B 29とグラマンの編隊だった。

袈裟彦は照準を定め、引き金に指を掛けて射撃の体勢に入る。

銃の感触とは気持ちいいものではない。引き金を引けば弾丸が出る。弾丸は相手を傷つけ殺す。銃の存在意義は「殺傷」である。ひやりとした鉄と鉛の重みが手に伝わってくる。

B 29には機銃の弾丸は当たらない。飛行高度が高すぎて、弾が届かないからだ。そのため、B 29よりも高度を下げて飛行しているグラマンを狙う。しかしグラマンの速度は速い。

グラマンの輪郭が、はつきりと見て取れるようになった。

「いくぞ！」

と袈裟彦は叫び、歯を食いしばって引き金を引いた。

刹那、高射機銃は咆哮し、炎と共に弾丸を放った。

連続して発射された弾丸が命中した手応えがあった。

が、火花が散るだけで墜ちはしない。グラマンの堅固な装甲にとっては、七・七ミリ機銃の弾丸など効くわけがない。

ふいに二十メートル先で砂煙が上がり、続けざまに袈彦のほうへ向かってきた。直ぐに、グラマンが自分目がけて銃撃をしているのだと分かった。

袈裟彦がいる機銃座は、一人一人分の穴とその周囲に積み上げられた土囊から成っている。射撃のときは、身を乗り出して撃つが、攻撃されれば穴の中に引っこんでやり過ごす。隠れてしまえば、まず弾丸に当たることはない。

身を縮めて穴の中に隠れると、穴のすぐ横の砂を機銃の弾丸が削っていった。飛んできた砂がかかり、思わず顔をしかめる。後ろを振り返ると、グラマンが悠々と飛

行していくのが見えた。

死の恐怖が、わいてくることは無かった。しかし、「これが戦争なのだ」という実感と理解は、掌に残った銃の感触と共に、心の中に沈みこんでいった。

これが戦争だった。

それが袈裟彦の戦争だった。